



**Data**

監督・脚本・撮影・録音・編集・配給：キム・ギドク

出演：中江翼／堀夏子／武田裕光／田代大悟／藤野大輝／合アレン

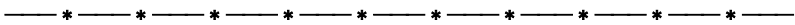
## 👁️👁️ みどころ

小型で高性能のデジカメが普及した今、監督が脚本はもちろん、撮影、編集、録音から配給まで1人でやることも可能。

園子温監督の『希望の国』（12年）をはじめ、日本の映画監督は何人も福島第一原発事故の直後からそのテーマに挑戦してきたが、韓国のキム・ギドク監督も彼なりの問題意識と使命感を持って本作に挑戦！その公開規模と興行収入にも注目だが、最大の焦点はその内容だ。

原発事故の5 km圏内にいた妊娠中の妻は人工妊娠中絶が必要な・・・？放射能汚染による奇形の心配は避けられないが、それをこの若夫婦はどう考えるの？なんとも悲惨な現実を目の当たりにすれば、それまでの綺麗ごとは吹っ飛んでしまうの・・・？

小泉純一郎元総理が「反原発路線」へ180度方向転換したことも考えながら、キム・ギドク監督の本作の問題提起をしっかりと受け止めた。しかして、現在続々と再開中の原発の可否は・・・？



### ■□■キム・ギドク監督が来日し、1人で執念の作品を！■□■

2011年3月11日に発生した東日本大震災から既に6年余りが経った。1995年1月17日の阪神淡路大震災からは既に22年半が経過した。阪神淡路大震災は地震だけの被害だったが、東日本大震災は福島第一原発の爆発事故が併せて発生したため、チェルノブイリ原発事故と並んで原子力発電所の是非と、それに必然的に伴うライフスタイルのあり方という問題が急浮上した。

しかし、他方で人間は忘れっぽい動物。また、悲惨な過去を忘れることによって新たな未来に進むことができる動物であることも確かだ。したがって、いつまでも福島原発の被害を考えていても仕方がない、大切なのは未来だ。そんな発想で、日本人がああ悲惨だった太平洋戦争の戦災被害を乗り越えてきたのも間違いはない。

そんな中、私の大好きな韓国の鬼才キム・ギドク監督が、なんと1人で来日し、1人で監督、脚本、撮影、録音、編集、配給までの役割を務めた、執念の本作が完成！

## ■□■徹底的に経費節減！その功罪は？日本公開は？■□■

本作は、2015年に発表された映画だが、2017年5月以降東京、名古屋、横浜、愛媛での上映後、2017年7月20日から大阪の第七芸術劇場で上演されるが、大阪での試写会はなし。サンプルのDVDを借りられるだけだ。もちろん、日本で上映する映画館もごく一部の劇場だけで、作品の収益の一部は、福島と昨年地震で被害に遭った行定監督の故郷・熊本に寄付されるらしい。

本作のプレスシートで、キム・ギドク監督は9つの質問に答えているが、質問7、8、9では次の3つの質問に対して、いかにも彼らしい回答をしているので、それに注目！

### 質問7 (韓国での)小規模公開の理由は？

この映画は私ひとりで日本へ行き、俳優たちと交渉して作った映画です。日本のいろいろな場所をロケハンして撮影場所を決め、午前小道具をつくり午後から撮影し、夜に編集して作った映画です。本当に辛く、肉体的にも精神的にも、自分自身を虐待する自分に嫌悪しました。しかし一方で、放射能についての恐怖と、俳優たちの献身的な協力があったため、諦めることはできませんでした。特に、この映画は合アレンさんの協力がなければ完成はしていませんでした。合アレンさんは、素晴らしい女優でありプロデューサーでした。

### 質問8 なぜいつもそのように苦勞をしてまで作品を作り続けるのですか。

そうですね。「The Net 網に囚われた男」という作品でもやはり寒い冬に約10日間の撮影で約1500万円の予算で撮ったのですが、とても大変でした。映画を見た観客が映画の完成度に不満を表したことに頭を抱え、苦痛を味わいました。このように苦勞して作り続けなければならないのだからと深刻に悩みもしました。大手で撮る方法がないことはないのですが、シナリオの改定、有名俳優のキャスティング、版權譲渡など、受け入れがたい点が多いのです。そのため、完成度で批判されても、「結局、作りたいストーリーが一番重要だ」と自分自身に言い聞かせながら、また新たな作りたいストーリーを生み出そうとするのだと思います。

質問9 『STOP』の日本公開について

2017年、小規模公開とDVD化の予定です。  
出演者の同意も得た上で、少しでも収益があれば、福島と熊本の被災者のために寄付することになりました。  
日本公開の準備は、合アレンさんが進めており、彼女の努力で劇場も賛同してくれました。  
上映していただく日本の劇場に心から感謝しています。  
この映画は日本の原発事故についての恨みや、非難を描くものではありません。  
いまだに福島の水産物の輸入を禁止している国は多いです。  
原発の事故は、世界の災害です。  
世界に約500基の原発があります。  
それは、核爆弾500個が常に爆発を待機していることを意味します。  
今後、それが更に1000個増えるのです。  
とても、恐ろしいことだと思いますか。  
私は、あまりの恐怖から、この映画を作りました。  
安全な地球のために、この映画を作りました。  
日本で『STOP』をご覧になる観客のみなさんに、感謝します。 以上

■□■キム・ギドク監督の原発問題についての問題意識は？■□■

小泉純一郎元総理は福島第一原発事故を見たことによってそれまでの価値観を180度転換し、「原発反対」陣営に加わったが、キム・ギドク監督は従前から反原発派だった。それが、福島原発事故以降はより強まったようだ。その結果、どうしても福島に入り、原発問題を映画にすることによって問題提起をしたいという思いを映画人として強めたい。それが本作として結実したわけだが、その点に関して、質問1から5に対して次のとおり答えているので、それにも注目！

質問1 福島の放射能を題材にした映画を制作することになった理由は？

私はこの世界に生きる上での危険要素について優先順位を持っており、その第1位が核問題です。  
核問題の危険には2種類あり、1つは戦争における核兵器、もう1つは原発です。  
2011年の福島原発事故による放射能漏れで、今でも周辺地域の土壌の除染は続いており、周辺の動植物にも大きな影響を与えました。  
福島の事故以降、私は恐怖心を持つようになりました。そして、放射能事故に関する映画を製作することで、原発政策に対して問題提起をしようと考えました。  
原発は、絶対に安全な電気ではありません。  
もう1つの危険要素は戦争と言いましたが、もし今戦争が起これば核兵器を使用する可能性は高く、同じ危険であると考えます。

質問2 原発が高価な電気であるというのはなぜですか？

全世界的に原発の建設は続いており、今後約1000基が建設される予定だといわれています。  
特に中国では約180基が建設予定で、その大部分は中国の東海岸に建てられる計画です。  
もし事故が起これば、韓国に黄砂が飛んでくるのと同じように被害を及ぼすことが予想されます。  
チェルノブイリ原発事故も多大な費用を投入しながら未だに収束しておらず、立ち入り禁止区域がある状態ですし、福島の廃炉費用は少なくとも20兆円に及ぶといわれています。  
原発は、老朽化や管理トラブル、自然災害によって想定外の災害を引き起こす可能性があり、その危険を避けることはできません。  
人間の安全のために、危険なものは作らないということが最善の策だと考えます。

質問3 では、原発の運転を停止した場合、現在必要な電気をどう賄えばよいのでしょうか

原発以前の電力を使用し、節約もしなければなりません。  
そして、既に開発されている代替エネルギーの使用に加え、更なる安全な代替エネルギーの開発が求められます。  
日本は福島原発事故後、すべての原発の運転を停止した後、大飯原発、川内原発、伊方原発、高浜原発が再稼働してしまいました。  
経済的差縮はややあったものの、それに耐えた現在東京の夜は、以前のように明るいです。  
福島事故後、日本はエネルギー政策を転換し、多くの民間の太陽光発電施設も生まれました。  
現在の太陽光エネルギーと蓄電の技術は進歩しています。電気を節約しながら、代替エネルギー施設を増設していくことは可能だと思います。  
今、「エネルギーデザイン」への注目が高まっています。  
工場用電気など経済活動に必要なものを除き、個人個人としては最小限の電気を使用しながら、自分で動き発電機となることで、原発がない世界を実現できると思います。

質問4 「エネルギーデザイン」とは？ 個人個人が発電機になるとはどういうことか？

現代社会とは、誇示の文化です。家や建物に人がいなくても、常に照明が明々と灯り、ネオンサインも大きくて数も多い。それらは、電気を著しく浪費しています。  
交通安全や保安の目的以外では、街頭の電気は節約しなければなりません。  
個人発電機とは、例えば最近の運動器具には発電機が内蔵され、1時間運動すればスマホが充電できる、といったものです。  
また、室内の暖房の温度を抑え、その分自分が動いたり運動することで体温を高めることで電気を節約するというのも、一種の個人発電だといえます。  
また、最近の住宅はリビングや寝室が広いですが、寝室を狭くすれば冷暖房の費用も抑えることができます。  
私も、3年前に木材で狭い部屋を作り、書斎や寝室として使っていますが、弱い冷暖房で夏も冬も快適に過ごしています。  
それ以外にも多様な方法があると思います。

質問5 「それはとても原始的な生活に思えますが、すでに最先端の文明社会に暮らす状態からそこに戻ることは可能でしょうか」

それはとても難しいことです。  
周囲に尋ねると、なぜそんな生活をするのかと反論されます。  
しかし、想定外の災害で命を落としたり、障害を持ったりという状況に陥るとすればどうでしょう。  
すべてのものには代償があると考えます。  
皆がスマートフォンを持つ最先端の時代において、私たち幸せとは何かを改めて考えなければなりません。  
本来、人間の生活とは、自分で食料を確保し、生活する家を作り、修理するということが基本でした。  
それが現代、各分野の専門家に役割が分割されました。  
しかし私は、ある程度は過去の原始的な生活に戻ることも悪くないと考えています。  
過去に戻るとは、頭を使うのではなく、体を動かすという意味です。  
労働は体と心を健康にしますし、それによって幸せも感じることができます。

## ■□■こんなのあり？絶対ありえない！いやいや・・・？■□■

本作の主人公は福島第一原子力発電所の爆発事故を、マンションの窓から身近に見た写真家のサブ（中江翼）と現在妊娠中の妻ミキ（堀夏子）。マンションが福島第一原発から5km圏内だったため直ちに立退きを命じられた彼らは東京に移住したが、そこで謎の政府の役人から電話が・・・。彼の話は「ミキは奇形児を産む危険が高いので、直ちに中絶を勧める」という親切(?)なものだが、政府の役人がホントにそんなことをするの・・・？さらに、半信半疑のままミキがその話を詳しく聞きに行くと「あくまで判断は自由意志です。」と言いながら、その役人は親切心をカタに、かなり強制的な行動に出たから、アレレ・・・。

これを見たサブが怒り狂い、大論争をし、ミキを連れ戻したのは当然だが、その後ミキの精神状態は大きく変調を来したから、さあ大変。また、こんな大変な事態になった後のサブの行動は・・・？しかし、民主主義とマスコミがここまで発展している日本でホントにこんなのあり・・・？絶対ありえない！いやいや・・・？

## ■□■いくらキム・ギドク監督でもこの設定はちょっと？■□■

本作でミキ役を演じたのはキム・ギドク監督を慕って韓国に渡り、その後監督、女優、プロデューサーとして大成した杉野希妃の『3泊4日、5時の鐘』（14年）に出演した女優・堀夏子（『シネマルーム37』144頁参照）。堀夏子は杉野希妃監督の下で々と育っている若手俳優の一人で、同作では脇役だったが、本作では見事に主役をゲット！生まれてくる子供が原発事故の影響のために奇形になるのではないかという心配と恐怖で身も心もズタズタにされ、精神に変調を来していくミキ役を見事に演じている。

もともと、本作の製作に杉野希妃は全く関与しておらず、韓国日本合作映画である本作をキム・ギドクとともにプロデュースしたのは合アレン。配給もKim Kiduk FilmとAllen Ai Filmだ。しかし、この合アレンは原発事故後も5km圏内にある自分の廃屋に残り、1人で赤ちゃんを産む女性の役を演じているので、それに注目！

政府関係者からの人工妊娠中絶の勧め（強制?）を断固拒否し、「俺たちの子は大丈夫だと信じるんだ」とカッコいい原則論を唱えていたサブも、現地に入り、廃屋に1人残った女（合アレン）が1人で子供（奇形児）を産む姿を目撃すると、その地獄のサマに啞然！これによって、サブのそれまでの主義主張は小泉元総理と同じように180度転換してしまっただけで、私がビックリしたのはここまですごい設定をしたうえ、その映像まで見せたこと。本作が「R15指定」とされたのは、きっとこのせいだろう。また、プレスシートには「世界各国の映画祭で物議を醸し、あまりの衝撃に上映困難とされた問題作が遂にベールを脱ぐ。」と書かれているが、そもそもの問題設定がすごいうえ、このシークエンスに私

は思わずゾー……。いくらキム・ギドク監督でもこの設定はちょっと……？

## ■□■こんなゲリラ的抵抗は全く無意味！■□■

本作中盤では、ミキの精神が異常を来していく姿と、奇形児を産む女の姿を目の当たりにしたサブがあまりの絶望感の中で、赤々と電燈が灯る大都会・東京で1人ゲリラ的抵抗を示す姿が登場する。しかし、東京の繁華街でイルミネーションを輝かせながら営業するパチンコ店に対して文句をつけて一体何の意味があるの？俺の金で、俺がネオンを点けて、俺が営業しているのに何が悪い！そう切り返されたことに対するサブの反論は、明らかに支離滅裂だ。そんなサブを見て、1度はサブから因縁をつけられた、福島のパチンコ店（？）を秘密のルートで売っていた男ナオ（武田裕光）が、急遽サブに興味を示し接触してきたところから、大手の電力会社を相手にした2人の新たな大冒険＝ゲリラ闘争（？）が始まることになる。

昭和40年代に発生した石油ショックの時も節電が叫ばれたし、近時は地球温暖化対策のためにエネルギーの転換が不可欠なことが長期的な国際課題になっている。そして、日本では災害のたびにそれが強調され、一部実行されているが、「喉元すぎれば熱さを忘れる」のことわざ通りで、なかなか結果が出ていない。大震災の後しばらくは灯っていなかったネオンもすぐに復活。あの災害もこの災害も、他人事のように忘れてしまうのが人間の習性だ。したがって、本作中盤にみる2人の男の行動は、風車に向かって1人突進していくドン・キホーテと同じように、かなり滑稽で馬鹿げたものと言わざるを得ない。もっとも、こんなゲリラ的抵抗が全く無意味なことは明らかだが、そうかといって何もやらなくていいの……？

## ■□■それから数年後、この夫婦は？家族は？■□■

ミキが精神に変調を来したことによって、出産を控えたミキと、ミキの出産への賛否を180度転換させたサブとの夫婦仲はかなりおかしくなっていたが、さてその展開は……？キム・ギドク監督はそれを詳しく描かず、82分とコンパクトな本作では、それから数年後のこの夫婦の実態を見せてくれる。それを見る限り、2人の夫婦仲は復活し、円満そうだ。生まれてきた1人息子も今は小学生になっていたから一安心。もっとも、この男の子には、音が異常に大きく聞こえるという耳の病があるらしい。すると、それはいかなる原因に基づくもの……？ひょっとして、あの原発事故による放射能のせい……？すると、政府の役人が言っていた通りの結果に……？それは誰にもわからないが、スクリーン上にはハッキリとそんな厳しい現実が示されるので、それに注目！

ちなみに、私が近々鑑賞する予定の廣木龍一郎監督の『彼女の人生は間違いじゃない』（17年）は、東日本大震災から5年後の福島県いわき市に住み、市役所に勤務している瀧内公美扮するヒロインが、週末になると東京の英会話教室に通っていると父親に嘘をついて、

毎週末毎に高速バスに乗って渋谷に行き、そこでデリヘル嬢をしている物語だ。これがお金のためでないことは明らかだが、さあそれは一体何のため？

人間は誰でもいつでも何らかの心の病を持つ動物だから、東日本大震災や福島原発事故に直面した人たちが、大なり小なり心に病を持つのは当然。しかし、それを韓国のキム・ギドク監督が映画化すれば本作のようになり、廣木隆一郎監督が映画化すれば、『彼女の人生は間違いじゃない』のようになるわけだ。もちろん、好き嫌いは人それぞれだが、本作のように1人で現地に入り、1人で撮影、録音、編集から配給までをこなして小規模な公開にこぎつけるという行動力を持った監督は、キム・ギドク監督だけだろうし、これほどハードな内容を詰め込んだ問題作を発表するのもキム・ギドク監督だけだろう。しかして、私の大好きな韓国の鬼才キム・ギドク監督の前作『The NET 網に囚われた男』（16年）（『シネマルーム39』145頁参照）に続いて本作に注目！

2017（平成29）年7月21日記